

莓パニック 6

～恋心編～

プロローグ　く変わりつつあるふたりく

ひよんなことから宝飾店に勤めることになった鈴木^{すずき いちご}苺。店長である藤原^{ふじわら}爽は、貴族のように上品なひと。彼はなぜか苺に過剰に構ってくる。

爽は職場でも苺をみっちりと教育し、プライベートでも付きつきり。ふたりきりで年末年始を過ぎすうち、爽がいつも側にいることが苺にとっては当たり前になっていた。

けれど、爽と親しげにしている女性を目撃した苺は、これまで体験したことのない想いに苦しめられることに……爽の存在は、苺の中でどんどん大きくなっていったのだ。

爽のほうも、天真爛漫^{てんしんらんまん}でとぼけた苺のことを愉快なおもちゃのように思っていたのだが、いつの間^{いつの間}にやら、決して手放せないほど大切な存在になっていることに気づいた。さらに、苺の幼馴染^{おとななじみ}である二ノ宮^{にのみやつよし}剛と苺の親しい関係に、激しい嫉妬^{しつと}を抱^{いだ}くことに。

そして、雪の降る夜、爽が苺のえくぼにキスをしたことで、ふたりの関係はさらに特別なものに変わりつつあった。

1 ちよつぱり残念な気分 〔苺〕

正月過ぎ。鈴木苺は、店の中にある彼女専用の部屋でイラストを描いていた。これは、今月末に行われるセールに使う予定だ。

初売りセールのあと、苺を含めた会議が行われた。議題は売れ残ってしまった福袋の商品をどうするか。苺がラッピングしたものをそのまま有効活用して、新たな戦略で客寄せをするべく、『新春宝箱セール』と銘打ったセールをすることになった。

会議に出るなんて、まるでキャリアウーマンになったみたいで、最高の気分だったんだけど……いつもと同じメイド服で参加させられたんだよね。できればスーツをびしっと着て臨みたかったのに。ほんと、店長さん、苺の気持ちを知ってないんだから。

この店の店長である藤原爽のことを考えた途端、彼女は切ない気分になった。

なんかなあ。自分でもよくわかんないんだけど……店長さんのことを考えると、胸がきゅんきゅんするんだよね。

昨日の夜、ふたりでコーヒー牛乳を買いにコンビニに行った。その帰り道に、店長さんが、ずっと一緒にいようって言うてくれて……

すごく嬉しかったのに、すごく胸が切なくて、涙が出てきちゃって……

一緒にいさせてくれるのかって聞いたら、苺の望むだけって答えてくれた。それで……

苺はそっと自分の頬に触れた。唇を押し当てられた感触を、まざまざと思い出してしまう。顔が、カーツと燃えるように熱くなった。

あれって……店長さん、ふざけていただけなのかな？

あのことがあってから、どうにも店長さんを意識しちゃってさあ。

コンビニから戻ったあと、テレビゲームをしたんだけど、そのときも心臓が意味もなくドキドキして……

店長さんはいま、ここにはいない。店長さんの部下のひとりであり、この店の店員も務めている岡島怜さんと午後から外出してしまった。

なんだかよくわからないんだけど……店長さん、いま、すっごく忙しいみたいなんだよね。そのせいか、ひどく疲れているように見える。大丈夫なのかなあ？

考え込んでいた苺は、我に返り、慌てて仕事を再開した。

ばおっとしてちゃ駄目だよ。セールに間に合うように、イラストを描かないと……

「よし、今日はここまでにしとこうかな」

もう仕事を終える時間だ。今日はこれから、中学の同窓会に行くことになっているのんびりしていられない。そういえば、店長さんはまだ帰ってきていないのかな？

帰り支度をする前に、確認しようとスタッフルームを覗いてみる。

……あ。

店長さんだと思って声をかけようとしたら、藍原あいはらみななさんだった。藍原さんは店長さんの一番の下で、岡島さんと同じく苺の先輩さん。

藍原さんはパソコンに向かっていたが、苺がやってきたことに気づいたのか、すつと顔を上げた。相変わらずお待さんまてさんみたいにかっこいい。

「ああ、鈴木さん。お疲れ様です。そろそろ時間ですね
時計を見ながら藍原さんが言う。」

「あの、店長さんは、まだ戻ってきていないんですか？」

「ええ。もうお帰りになる時間なんですが……遅いですね」

藍原さんは首を捻ひねりながら言うのと、苺に視線を向ける。

「これから同窓会に行かれるのでしょうか？ 着替えなくていいのですか？」

藍原さんの言葉に従って、更衣室に入ろうとしたら、いつものようにスタッフルームに夕食が届いた。

「藍原さん、苺、夕食の準備しましょうか？」

盛り付けマスターを自負じふしている苺は、張り切って申し出たが、藍原さんは首を横に振る。

「それは彼らがやります。鈴木さんは着替えを……」

「そうですかあ」

ちよつぱり残念な気分で、苺は更衣室に戻った。

2 予期せぬ事態 ㄱ 爽

やれやれ、ようやく帰れる。

仕事を終えた爽は、怜を従え、足を速めた。

会議が長引いてしまい、予定していた終了時刻を大幅に過ぎてしまった。

まさか、こんなに遅くなるとは……

苺を同窓会の会場まで送って行く約束をしていたのに……もう間に合わない。

「爽様」

苛立いらだっていると、後ろから怜が声をかけてきた。

「なんだ？」

「急いでも、店に着くのは七時過ぎですね……鈴木さんとの約束は、どうなさいますか？」

思わずむっとしてしまう。そのことをさっきからずっと考えているというのに。

こうなったら、自分の代わりに要に送らせるしかないだろう。だが……要に苺を任せたくない。なぜなら要は苺に好意を持っているかもしれないからだ。

途中で席を外すことができれば、屋敷の執事頭である吉田善一よしだ ぜんいちに電話をして、苺を送るようにと命じられたのに……

そのとき、後頭部にズキンと痛みが走った。爽は顔をしかめ、頭に手を当てる。
「爽様、どうかなさいましたか？」

爽を見て、怜が心配そうに声をかけてくる。

「いや……なんでもない」

頭痛がしたなんて口にしたら、怜を動揺どうようさせてしまう。頭痛の原因は、単なる寝不足だ。
苺と同じベッドでは、ぐっすり眠れなくなってしまったのだ。

……それでも、苺と離れていたくない。

「はあっ」

つい、疲労感の滲にじんだため息をついてしまい、爽はハッとして口元を押さえた。

「爽様？」

「うん？」

「体調がよくないではありませんか？ 顔色が悪いです」

「大丈夫だ。それより、要に電話してくれ。私の代わりに苺を送ってもらおうしよう」

「わかりました」

怜は、すぐさま携帯を取り出し、要に電話をかけた。そして、テキパキと用件を伝える。

「怜」

「はい。なんでしょうか？」

「後部座席に座らせろ、と伝えろ。それと、帰りは私が迎えに行くとも」

怜は頷うなづき、爽が言った通りに要に伝える。

苺が、要の車の助手席に座るなんて許せない。愚おろかな感情かもしれないが……
自分自身に落ち込んでいたそのとき、急に足の力が抜けた。

……なんだ？

ぐらりと身体が傾かたぐ。

次いで激しい衝撃と痛みを感じた。

「そっ、爽様っ！」

怜の叫び声が遠くで聞こえる。

なんだ？ 私はどうしたんだ？

頬が冷たい……

意識が薄まってゆき、爽はゆっくりと目を閉じた。

3 ここは黙秘で ー 苺 ー

更衣室で髪を梳すいていた苺は、スタッフルームから大きな声が聞こえ、驚いて耳を澄ませた。
……藍原さんの声？

苺は何かあったのかと思い、更衣室を出てスタッフルームに向かった。

藍原さんは、携帯を手にしたまま固まっている。何やら、様子が変だけど……

通話中なら話しかけるべきではないだろうと思い、しばらく見ていたが、どうも通話は終わっているようだ。

「どうかしたんですか？」

そつと声をかけてみたら、藍原さんはハツとして振り返った。

「ああ、着替え終わったんですね」

やはり通話は終わっていたらしく、藍原さんは携帯をポケットに戻しながら言う。

「はい」

「なんかあったんですか？」

「いえ。たいしたことでは……それより、爽様から連絡がありましたよ」

「そうなんですか？ 店長さん戻ってくるんですか？」

「実は、予定通りには戻ってこられないようなのです」

なんだ、帰ってこないのか……

「仕事が延びているんですか？」

「そうではないのですが……自分の代わりに鈴木さんを送るようにと……」

「ああ、苺なら大丈夫ですよ。ひとりでも会場まで行けますから。藍原さんは用事があるんでしょう？」

藍原さんは少し迷いのある表情をしたあと、首を横に振る。

「いえ、送らせてください。爽様に命じられましたので……」

頼み込むように言われてしまい、苺は甘えることにした。

藍原さんの車の後部座席に乗せてもらう。車はすぐに発進した。

苺は自分の身なりをチェックする。

クリスマスにお母さんがプレゼントしてくれた、クリーム色のニットワンピースを着てきたんだけど……おかしくないよね？ バッグはお兄ちゃんのお嫁さん、真美さんからもらったピンクのものだ。バッグを開け、剛からもらったお財布を見た苺は顔をしかめた。

そういえば……昨日、剛にはずいぶんと世話をかけちゃったな。

店長さんが綺麗な女性のお客さんに接客しているところを見たら……すつごくもやもやした気分になっちゃって。いたたまれなくなつて、お店を飛び出してしまったのだ。歩いて家に帰ったら、剛と偶然会つて……。あいつの顔を見たら、どうにも気持ちを抑えられなくなつて泣いちゃって。うーっ、思い出すと恥ずかしい。

けど、電話してお礼を言つとくべきかな。あいつのおかげで落ち着くことができたんだし。

そういや、藍原さんにも、みつともないほど動揺したところを見せちゃったな……

苺は、店長さんからもらったピンクリングを見つめた。

店長さん、帰りは迎えにきてくれるのかなあ？

苺は顔を上げ「藍原さん」と呼びかけた。だが、返事がない。

あれっ？ 聞こえなかったのかな？

「藍原さん！」

「あつ、はい」

さつきより大きな声で呼んだら、藍原さんを驚かせてしまったようだ。

「あつ、大声を出してごめんなさい。聞こえなかったみたいだから……」

「そうでしたか。すみません。考え事をしていた……」

考え事？

「仕事のことでしか？ 店長さんたちのことですか？」

「ええ、まあ」

あの藍原さんが、呼びかけられても気づかないほど考え事に没入しているなんて……これってただ事じゃないんじゃない？

むくむくと不安が湧いてくる。

「何か問題が起こった訳じゃないですよねえ？」

「……鈴木さん」

「あの、帰りは、店長さんが迎えにきてくれるんですよ？」

確認するように聞くと、藍原さんは黙り込んだ。

「藍原さん？」

「爽様は、無理かも……しれませんね。そのときは、私か怜のどちらかがお迎えに上がります

ので」

苺は眉をひそめた。

店長さんに何かあったのだろうか。

「藍原さん、店長さんに何が起こったんですか？」

「困りましたね……どうやら、言葉の選択を間違えてしまったようだ。鈴木さん、同窓会が終わったら話しますから」

そんなの待ってられないよ。

「聞かせてもらわないと、気になっちゃって、友達とのおしゃべりを楽しめませんよ」

そう言ったが、藍原さんは答えてくれない。苺は頬を膨らませ、携帯を取り出した。

このままじゃ埒が明かない。店長さんに直接電話をかけてやろう。

呼び出し音が鳴り始める。苺の様子に気づいた藍原さんが「鈴木さん？」と慌てて声をかけてきた。

「いったい誰に？ ま、まさか……爽様にかけているのではありませんよね？」

そのまさかだが……ここは黙秘だ。

「怜、必要ないと言っているだろう」

爽は苛立ちながら、運転している怜に声をかけた。

「そうはいきません。爽様、お願いですから、おとなしくしててください。もう着きますので」

「病院など行く必要はないと何度も言っている」

「駄目です。意識を失くして倒れたのですよ。精密検査を受けるべきです」

「あれはちよつとふらついただけだ。寝不足だったから……」

倒れたのは事実だが、すぐに意識は戻ったのだ。頭痛薬でも飲んで、一晩ぐっすり眠れば済む。

なのに、怜はどうあつても爽を病院に連れていく気でない。要からそうするように指示されたに違いない。そうこうしているうちに、車は病院に着いてしまった。

「爽様」

はーっ！ もう諦めるしかないか……

入院なんてことになったら、最悪だ。仕事は滞るし、苺とも一緒にいられない。

車から降りないでいると、怜が不安そうな顔をして、後部座席のドアを開けて覗き込んできた。

「車椅子を頼みましょうか？」

爽は真剣な表情の怜を見て眩暈がした。車椅子で病院の中に運び込まれるなど、絶対に嫌だ。

「必要ない。歩いて行ける」

怜の身体を押しつけて車を降りようとしたら、携帯に電話がかかってきた。

降りるのをやめ、かけてきた相手を確認する。

「爽様、いまは電話などしている場合では……うっ！」

爽は空いているほうの手で怜の口を塞いでやった。

「黙っている！」

きつく命じ、携帯を耳に当てる。

「店長さん？」

苺の声が受話口から聞こえてきた。

「どうしたんです？ 同窓会は？」

「店長さん、大丈夫なんですか？」

うん？

「まさか、要に聞いたんですか？」

絶対に苺には言うなど、命じておいたのだが……

「ううん、何も教えてくれないんですよ。だから苺、すっごい不安になって……それで電話したんです」

苺の言葉を聞き、口元がしまりなく緩む。

「私は大丈夫ですよ」

「なら、帰りは苺を迎えにこれるですか？」

爽は病院を見つめ、顔をしかめた。

少なくとも今夜は出してもらえないだろう。

「いえ……今夜は帰れそうにないです」

「えっ？ か、帰ってこれないんですか？」

苺の声には、寂しさが滲_{にじ}んでいる。

「寂しいですか？ 私が帰らないと……」

「そりゃあ、寂しいですよお」

しょぼくれた返事に、爽の喜びが増す。

「それで、苺、貴女はいま、どこにいるんです？」

そう問いかけたところで、病院から数人の人間が出てくるのが見えた。

怜が前もって病院に連絡を入れていたから、到着したのに気づいて迎えに出てきたらしい。

「藍原さんの車の中です。いま同窓会の会場に向かって……」

「そうですか」

どうやら迎えに出てきたのは、溝尾_{みぞお}医師と看護師長のようだ。ここは爽の掛かりつけの病院で、看護師長とは顔馴染みなのだ。そして溝尾は、爽の父方の従兄。最悪なことに、看護師長は空_{から}の車椅子を押している。いただけないお迎えに、思わず顔が歪_{ゆが}む。

もう苺と話している余裕はない。

「とにかく同窓会を楽しみなさい。終わってから、また話しましょう」

「わかったです」

その返事を聞いて、爽は電話を切った。

5 心もとなさ　　苺

女の子だけの同窓会は盛り上がり、苺は存分に楽しんだ。

ひさしぶりに会う子と話すのは楽しかったし、結婚秒読み段階なんて子もいて、驚かされた。

けれど、話題の中心は、なぜか苺になっていた。幼馴染_{おきななじみ}のすいちゃんが、店長さんのことをあれこれ話して聞かせたからだ。

そして小指に嵌_はめている指輪を見て、みんな苺は店長さんと付き合っていると思い込んでしまった。

ここまで盛り上がってしまうと、違うとは言いつらい。

あつという間に時間が過ぎ、解散の時間となった。

苺は店の出口に向かいながら、みんなとの別れを惜_おしんだ。

「苺は、あのひとが迎えにきてくれるの？」

すいちゃんに聞かれ、苺は首を横に振った。

藍原さんか岡島さんがきてくれるって言ってたもんね。

同窓会が終わったら、また話そうと店長さんは言ってくれたけど、直接会って話すわけじゃなくて、電話でってことなんだよね？ 今夜は帰れないって言ってたし……

ということは、ワンルームに戻ってもひとりきりなんだ。

……ひとりぼっちじゃ寂しいし……実家まで送ってもらおうかなあ。

店から出た苺は、寒さに身震いした。

「うわっ、さっむいねえ」

「ほんとお、たままない寒さだわあ。あれっ？ みんな駐車場で何やってるんだろう？」

すいちゃんがそう言い、毎日駐車場に目を向けてみたら、なぜかみんな同じ方向を見つめている。

「何を見てるんだろうね？」

すいちゃんに問いかけた苺はハツとした。駐車場に停まっている車の側に、ふたりの男性がいる。

ひとりには藍原さんだった。そして車に寄りかかるようにして立っているのは……

それが誰か認識した瞬間、苺は一目散に駆け出した。

「店長さん！」

きてくれたんだ！

「苺」

呼びかけられて、嬉し涙が滲む。

帰れないって言っていたのに……きてくれたんだ。

「お仕事、大丈夫だったんですか？」

涙を拭きながら、苺は店長さんに尋ねた。

「ええ。それで貴女のほうは？ 同窓会は楽しめましたか？」

「はいっ。すっごい楽しかったです」

「それはよかった。あそこにいらっしやるみなさんは、貴女のご友人ですか？」

店長さんがみんなのほうに視線を向けて聞く。

みんなこつちを見ていたので、苺は手を振った。

「爽様、そろそろ」

藍原さんが急かすように促したが、一塊になっていた友達はいっせいに駆け寄ってきた。

「い、苺の彼氏さんなんですか？」

友達のひとりが店長さんに問いかける。

「ええ。初めまして」

あちゃーっ。店長さんときたら、ためらいもせず肯定しちゃうなんて……

「は、初めまして」

「あ、あの、苺とどこで知り合ったんですか？」

ずいぶんな騒ぎになってしまった。

「爽様」

店長さんの背後にいる藍原さんが、再び急^せかす。

「そ、爽様？」

『爽様』という呼び方に、みんな驚いている。

「早く、お戻りなりませんと」

うん？ 早く戻らないとって……問題はまだ解決していないってことなのかな？

「わかってる。……苺、もう帰れますか？」

店長さんからやさしく問われ、苺は「はい」と頷^{うなず}いた。そして、みんなに声をかける。

「それじゃ、帰るね」

店長さんから車に乗るように促^{うなが}され、後部座席に店長さんと並んで座る。すると、藍原さんがドアを閉めてくれた。苺は友人たちに手を振って、その場をあとにした。

「店長さん、また仕事に戻るんですか？」

「いえ……」

苺はパツと笑みを浮かべた。

「なんだ。それじゃ一緒にワンルームに帰れるんですね？」

「いえ……」

また否定の返事で、苺は戸惑った。

「仕事ではないですよ」

店長さんは疲れの滲^{にじ}んだ息を吐き、座席にもたれた。

「疲れてるんですか？」

「爽様」

運転している藍原さんが、気遣わしげに店長さんに呼びかける。

「……大丈夫だ」

ひどくけだるそうな店長さんの返事に、苺は不安になってきた。

働きすぎで体調崩しちゃったとか？ あつ、熱があるんじゃないのか？

苺は店長さんの額に手を当てた。

うーん、熱くはないようだけど……

眉を寄せていると、店長さんは額においた苺の手を取り、そのまま握りしめた。まるで元気をわけてもらおうとしているように感じて、苺はもう片方の手で、店長さんの手を包み込んだ。

「大丈夫ですか？ もう家に帰って寝たほうがいいですよ」

苺のワンルームでも、店長さんの家でもどっちでもいいから……

「それが……今夜はどうしても家には帰れないのですよ」

苺はびつくりした。こんなに疲れてるのに……

「でも、お仕事じゃないんでしょう？ それだったら、行かなきゃいけないところのひとに、いまは具合が悪いからって話して、明日にしてもらえばいいですよ」

運転席から、小さく嘖き出した音が聞こえ、苺は藍原さんに目をやった。
い、いま藍原さん、嘖き出した？ な、なんで？

すると今度は隣から、くつくつと笑う声が聞こえた。

苺は顔をしかめて、店長さんを見る。

「なんでふたりして笑うんですか？ ぜんぜん笑うところじゃないですよ」

苺はぷりぷりして、ふたりを睨んだ。

「すみません。貴女を笑ったわけではないのですよ」

「それじゃ、なんで笑ってるんですか？」

「苺」

突然真面目な顔で呼びかけられ、苺は店長さんを見つめた。

「なんですか？」

「ワンルームに帰りたいですか？」

言葉の真意がわからず、苺は首を傾げる。

「でも店長さんは、帰れないんですね？」

そう問いかけながら、苺は無意識に店長さんの手をさする。

「ええ」

その返事に胸が切なくなる。

やっぱりか……。店長さんはどうしても、これからどこに行かなければならないらしい。

……。でも、こんな状態で行かせるなんて、心配でならないよ。

「あの……。苺もついてっちゃ駄目ですか？」

苺は駄目元^{だめもと}でお願いしてみる。すると、店長さんが眉を上げた。

「ついてきてくださるんですか？」

そう聞かれ、苺は驚いた。

「えっ？ ついてつてもいいんですか？」

「爽快」

咎めるように藍原さんが呼びかける。

「別にいいだろう」

「ですが……」

「要、ワンルームに向かってくれ」

えっ？ ワンルーム？

戸惑っている、店長さんが苺に微笑みかけてきた。

「数日泊まることになりますから、貴女の着替えを用意していきましょう」

「と、泊まる？ あ、あの、どこかに行くんですか？」

まさかまた、旅行に行ったりするんじゃないよね？

「着いてからのお楽しみですよ」

またそれか……。でも、店長さんは楽しそうだ。苺はほっとした。

「でも、体調は大丈夫なんですか？ どうしても店長さんが行かなきゃいけないんですか？」
「ええ。行かない訳にはいかないんですよ」
「そうか。ならば黙ってついて行くでしょう。行き先を教えてくださいたくないのいつものこと」
「わかったですよ。苺、謎の場所について行くですよ」
苺は店長さんの手をぎゅっと握りしめた。

ワンルームに戻り、急いで着替えをバッグに詰め、あたふたと車に戻ってくると、店長さんはぐっすりと眠り込んでいた。

「ありや、寝ちゃったんですね？」

声をひそめて口にする。店長さんの身体には、グレーのブランケットが掛けられていた。たぶん、藍原さんが掛けてあげたのだろう。座席も寝やすいように、後ろに倒してある。

「では、向かいますね」

苺が「はい」と答えると、車は静かに動き出した。

「店長さん、すっごく疲れてるんですね？」

「お身体を考えず、無理をなさりすぎるのですよ」

苺は「ですよ」と相槌を打った。店長さんはいつもパソコンと睨めっこしてる。宝飾店でのお仕事以外にも、いっぱいお仕事を抱えているのだ。

苺は店長さんの寝顔を見つめた。青白い顔をしているのに気づき、不安が膨らんでくる。店長さ

んの目にかかっている前髪を、苺はそっと払って店長さんに寄り添った。

店長さんの元気がないと、苺の元氣も消えていくような気がした。

6 手に余るお荷物 ー爽ー

目が覚めた爽は眉を寄せた。なんと苺が爽に寄り添って寝ている。
「爽様」

そっと呼びかけられ、爽は運転している要に「ああ」と返した。

苺がワンルームに着替えを取りに行き、彼女を待っている間に寝てしまったらしい。しかし、ずいぶんと気分がいいな……もうすっかり疲れが取れた気がする。

もう病院に行く必要などないのだが……

まあ、いいか。苺を連れていけることになったのだ。ならば数日の入院生活も悪くない。パソコンさえあれば、どこでも仕事はできるしな。

爽は苺の寝顔を見つめ、考え込んだ。

彼女の友人から、彼氏なのかと聞かれ、私は肯定した。これで自分は、あの場にいた全員に苺の恋人だと認識されたことになるが……

あの苺がどう考えているのかが、いまいよくわからない。だが、あの場で苺は否定しなかった。

苺は私のことを愛していると思うのだ……けれど彼女は、私への想いが恋心なのか自覚できていない。

もどかしくなって、爽は大きくため息をついた。運転している要が気がかりそうにバックミラー越しにチラチラと自分を見ているのに気づき、爽は「大丈夫だ」と声をかけた。

数分と経たず、病院に着いた。

「爽様、これを」

運転席から要がマスクを差し出す。これで顔を隠せということなのだろう。見ると、要もマスクをつけようとしている。

マスクをつけた爽は、苺を起こした。

「苺、起きなさい！」

大きく揺すりながら、耳元で叫ぶ。だが、起きない。

「鈴木さん……すごいですね」

要ときたら、感心したように言う。要の口調に爽は噴き出した。だが、笑っている場合じゃない。早く病室に戻らないと……抜け出したことがバレたら、まずいことになる。

「苺、いい加減に起きなさい！」

怒鳴りつけたが、まるで反応がない。……まったく、苺ときたら……

「お目覚めになりませんか？」

「……ああ」

「仕方ありません。爽様、鈴木さんは私がワンルームにお送りしますよ」

爽は要を睨んだ。

そんな提案、受け入れられるものか。寝ている苺を要に託すなど……たとえ苺が、どれだけ手に余るお荷物になろうとも絶対に連れて行く。

「彼女は連れて行く」

断固として言う、要がため息を落とす。

「それならば、私がお連れしましょうか？」

要がそう申し出たが、そんなものは却下だ。私以外の男が、彼女に触れるなんて。

「私が連れて行く」

「爽様……いまはご無理かと……」

呆れたように言われ、爽はむっとして「大丈夫だ」と言い返した。

すると突然、寝ていたはずの苺が、「ついて行くですよ」と言い、むっくりと起き上がった。爽はぎょっとして苺を見た。彼女は、ふあああっと、大きなあくびをしている。

いまのいままで、あれだけ起こしても起きなかったのに……

「あれえ、店長さん、起きたですか？」

寝ぼけ眼で言う。

「もう目的地に……はふう……着いたんですかあ？ 苺お、荷物持つて……えつとお」

頭がふらふら揺れている。かなり危なっかしいが、なんとか連れて行けそうだ。

「苺、荷物は要が持つてくれます。さあ、行きましょう」

手を引いて苺を車から降ろす。すると苺は首を傾げながら、周囲を見回している。ここが病院だとは、まだ気づいていないようだ。

「さあ、こちらですよ。歩けますか？」

苺を支え、夜間専用の出入り口に向かった。苺の荷物を持った要は、少し前を歩きながら、心配そうに振り返ってくる。

「もちろん歩けますよお」

ふらつきながらも、苺はそう答える。爽は噴き出しそうになるのを堪えた。

「まだ眠そうですが……」

そう言うと、苺は空いているほうの左腕を振り回した。

「眠くなんかありませんよお。ほら、目もかっぴらき」

苺は手を顔の横に当てて言う。

かっぴらきどころか、ぜんぜん開いていない。

爽と要は同時に噴き出した。笑われていることに気づいた苺はきよろきよろする。

「いま笑ったのは……誰ですか？」

眠たそうな顔でむっとして言う。またも噴き出しそうになり、爽は口元を引きしめた。

笑っている場合じゃない。

「苺、そんなことはどうでもいいから……。とにかく転ばないように気をつけてください」

「転んだりしないですよ。ほらっ、苺、こんなふうに、シャッキシャキで歩けるですよ」

苺は身体をふらふらさせながら、足を交互に上げる。

どこが、シャッキシャキだ、どこが！ と突っ込んでやりたい。

まったくもう、付き合っていられない。爽は苺の腕を、力任せに握りしめた。

「では苺、シャッキシャキで歩いてください」

そう言葉をかけたら、苺は「りようかい」と返事をする。

「どちらが病人かわかりませんね……」

苺を抱えるようにして歩く爽を見て、要が呟いた。

要がエレベーターのボタンを押す。

「苺、ほら、エレベーターに乗りますよ」

「はい。エレベーターに乗ります」

三人はやつとこさエレベーターに乗り込んだのだった。

7 気分は極秘潜入捜査官 〈苺〉

身体がふわんと浮いた気がして、苺は目を開けた。そして何かに寄りかかっていることに気づく。苺はハッとして頭を上げた。

マ、マスクマン！

ぎよっとしたあまり、一瞬にして目が覚めた。

あつ！ な、なんだよもおつ。大きなマスクをつけているのは店長さんじゃないか。

「店長さん。マスクなんかしてるから、苺、知らないひとかと思ってびっくりしたじゃないですか」

「ようやく目が覚めたようですね」

苺はきょとんと店長さんを見つめた。そして、いま自分がエレベーターの中にいることに気づく。

ここは、どこなんだろう？

キョロキョロしていると、藍原さんが「鈴木さん」と呼びかけてきた。

「はい」

「すみませんが、エレベーターを降りたら、部屋に着くまで何も話さないくださいね」

藍原さんは命じるように言う。

「えっ、訳ありますか？」

謎の匂いがプンプンし始め、苺はドキドキしてきた。

入ってはいけない場所に、極秘に潜入している感じだ。

店長さんも藍原さんもマスクで顔を隠しているし……

「ねえ、苺はマスクで顔を隠さなくていいんですか？」

期待を込めて尋ねる。

「苺、貴女は、その必要はありませんよ」

「えっ、それじゃ、店長さんはその必要があるってことですか？」

店長さんの目が笑ったのがわかった。

「苺、鋭いですね」

「えっ、当たりですか？」

「当たりですよ」

おほっ。苺は笑みを浮かべた。

エレベーターの扉が開いた。苺は、あれっ？ と思う。

ここ病院じゃないか。なんで病院に？

戸惑っていると、藍原さんがすっと前に出て、なぜか辺りを窺うようにしながらエレベーターを

降りる。な、なんだ？

藍原さんはこちらを向いて、シリアスな顔で頷く。

……よくわかんないんだけど……極秘の任務で敵の陣地に潜入する捜査官みたいでかっこいい。

わくわくしていると、店長さんに手を引っ張られた。

「ゆっくり歩いて、できるだけ気配を消して」

小さな声で店長さんが指示を送ってくる。

藍原さんが先頭になり、廊下を進む。そしてさらに階段を上った。

どこまで行くんですかと聞きたいが、口を開くなど指示されている。

ある扉の前で藍原さんが立ち止まり、振り返ってきた。店長さんが頷くと、藍原さんは扉を開けた。

「あの……」

「しっ！ 声が響く」

店長さんに叱られ、苺は慌てて口を閉じる。

「行きましょう」

藍原さんは大きく開けたドアを押さえている。苺と店長さんは藍原さんの横をすり抜けて部屋に入った。

病室はとても広かった。入り口を入ってすぐのところに、洗面所とトイレではないかと思われるドアが二つ並んでいるし、ベッドだけでなく豪華なソファとテーブルセットまで置かれている。

ドアを静かに閉じた藍原さんと店長さんは、同時に安堵したような息を吐き出した。

いったいなんなんだろう？ ふたりがこんなにこそしている理由がわからない。単に入院しているひとのお見舞いにきたんじゃないのか？

ベッドに誰か寝ているのを確認し、苺は眉を寄せた。いったい誰なんだろう？

苺はハツとした。も、もしや……

「わ、羽歌乃おばあちゃん、病気になったんですか？」

「羽歌乃さんではありませんよ」

「そ、それじゃ、誰が？」

「爽様」

苺の問いはスルーされ、藍原さんが店長さんに呼びかける。そして、「もしや？」と口にする。

もしや？

店長さんは藍原さんの言いたいことがわかったようで、頷いてベッドに歩み寄る。入院しているのが誰なのか気になってならない苺は、店長さんと一緒にベッドに近づいた。

「どうやら、寝ているようだね？」

「そのようですね」

店長さんに相槌を打つと、藍原さんは上掛けに手をかけた。入院患者さんは横向きに寝ているように、苺には頭しか見えない。

「まさか、善ちゃんじゃないですよね？」

「違いますよ」

店長さんがそう答えたのと同時に、藍原さんは上掛けをそっと捲った。苺は首を伸ばして誰だか確かめた。

「お、岡島さん！」

苺は目を丸くして叫んだのだった。

気持ちよさそうに寝入っている部下に、爽は笑いが込み上げてきた。

怜ときたら、案外豪胆(ごうたん)じゃないか。自分の代わりに、ベッドで寝ているように命じた時には、ずいぶんと不安そうだったのに……

「怜」

要が怜に呼びかけた。さらに肩に手をかけ、そつと揺する。すると、苺は慌てて要を押さえ込んだ。

「藍原さんつてば、何してるですか？ 駄目ですよ！」

ああ、そうか。苺は怜が入院していると思い込んだのだな。

「苺」

爽は苺の肩に手をかけ、要から離れた。

「だって、具合が悪いのに、起こすなんて……」

そのとき、怜が「う、ううん……」と呻(うめ)いた。次の瞬間、目を開けて、ガバツと起き上がった。

「あ、あ、あ……す、すみません！ 私ときたら……知らぬ間に寝てしまつて……」

勢いよく頭を下げる。

「岡島さん、寝てていいんですよ。入院してるんだもん」

苺は同情するかのように声をかけた。彼女がいることに気づいていなかったらしい怜は、驚いて目を見開く。

「あの……どうして鈴木さんが、ここに？」

怜は急いでベッドから降りる。怜が着ている淡い水色の寝間着を見て、爽はうんざりした。また、自分がこれを着なければならぬのか……

「だ、駄目ですよ、岡島さん。寝てなきゃ」

「苺、いいですよ」

そう言うと、苺は困惑顔で見つめてくる。

「爽様が、どうしても鈴木さんを連れていくとおっしゃるのでね」

要ときたら、わざとらしく呆(あき)れたように言う。

「すぐに着替えます。……爽様、これありませんが……」

申し訳なさそうに言われ、爽は笑った。言われなくても、それしかないのは知っている。元々自分が着ていたものを怜に着せたのだから……

「それでいい」

怜は着替えのために部屋の中にある洗面所に入った。

爽は諦(あきら)め気分でコートを脱ぐ。すると、要がすつと手を差し出して、コートを受け取った。スーツの上着も要に渡し、爽も洗面所に向かう。

「て、店長さん、どこに行くんですか？」

苺が慌てたように聞いてきた。

「すぐに戻りますよ」

それだけ言い、爽は洗面所に入った。

それにしても、苺は鈍いな。入院患者が私であることに、まだ気づかないとは。

「爽様。あの、すみません」

怜は水色の寝間着を恐縮しながら差し出す。

「気にかけることではないぞ」

「は、はい。ですが……」

「悪かったな」

「はい？」

「面倒なことを押し付けて」

「あつ……そ、そのようなお言葉をいただくと……身の置き場がありません。私ときたら、寝てしまっただけ……」

「疲れていたんだろう」

「それは爽様のほうです。あの……いまさらですが、お身体は大丈夫ですか？」

「ああ、心配いらない」

そう言っても、怜は不安を拭えぬようだ。

怜が洗面所から出て行き、爽は寝間着を見つめた。

こんなもの着たくないのだが……爽は、仕方なく着替え始めた。

寝間着姿で部屋に戻ると、苺は目を丸くした。

「なんで店長さんが、それを着てるんですか？」

「私が着るべき人間だからですよ」

「入院患者は店長さん？ えっ、でも、ならなんで苺を迎えに？ 岡島さんはなんともないんですか？」

「怜には、私の身代わりをしてもらっていただけですよ」

「ええっ！ なんでそんなことをしたんですか？」

苺を迎えに行きたかったからだ。人任せにしたくなかった。理由はそれだけ……黙っていたら、苺は急に爽の身体のあちこちを触り始めた。

「どこ？ どこが悪いんですか？ 怪我したんですか？ 病気ですか？ 頭ですか、足ですか？」

苺の動転振りに、にやけそうになる。

「私は大丈夫ですよ。少し眩暈がしただけです。もうすっかりいいんですが……検査のために入院することになってしまったんですよ」

「め、眩暈？」

苺は心配そうに眩暈、爽を見つめてくる。爽は安心させるために微笑んだ。

「爽様。ベッドに入られたほうが……看護師が巡回にくるかもしれません」
「そうだな」

要に促され、爽はすぐにベッドに入った。

「店長さん、大丈夫ですか？」

苺はまるでさがるように声をかけてくる。

「苺、大丈夫ですよ。落ち着きなさい」

「だって……店長さんに何かあったら……苺は……苺は……」

驚いたことに苺は顔をくしゃりと歪め、涙を零す。

「苺、大袈裟ですよ。私は死にはしませんよ」

「し、死ぬとか言っちゃ嫌ですよお！」

苺は爽の寝間着を掴んで引っ張りながら、本気で叱りつけてくる。

やれやれ。苺ときたら困ったものだ。要は笑っているに違いないと思って視線を向けると、意外なことに、ひどく深刻な顔をしている。怜も同様だ。

これは……対処に困るな。

「そう深刻になるな。この私が、そんなに簡単に死ぬわけないだろう」

「もちろん、そうあっていただかないと困ります」

「いいか、単なる過労だ。ここにいるのは長くても数日のことだぞ。溝尾医師に聞いただろう？」

「安静にしていれば回復なさるでしょう。けれど、爽様はご無理をすぎです。いつまた、倒れら

れるか……」

ため息混じりに要が口にした途端、苺が息を呑む。

「て、店長さん！」

「大丈夫ですよ！」

苺を不安にさせた要を睨み、苺に言い聞かせる。すると苺から、「そんなふうに興奮しちゃ駄目ですよ。安静にしないで」と言われ、爽は大人気なくもカチンときた。

「興奮させたのは貴女でしょう？」

「い、苺は、興奮させるつもりなんか……ただ、店長さんが……」

苺が肩を落としたのを見て、爽は彼女の頭をやさしく撫でた。

「心配してくださいるのは嬉しいですよ。ありがとうございます、苺」

爽は要と怜に向き直った。

「ふたりとも、心配をかけてすまなかった。今後は気をつける」

ふたりは頷いたが、まだ深刻そうな顔をしている。

「遅くまで付き合わせてしまつて悪かった。ふたりとももう帰っていいぞ。要、後は任せたぞ」

「はい」

「それと、随時報告を頼む。今夜は大人しくしているから、明日は報告書を吉田に持たせてくれ」
吉田には倒れたことをまだ知らせていない。倒れたなんて知ったら、吉田のほうが具合を悪くしそうだ。

「わかりました。爽様、羽歌乃様には？」

「羽歌乃さんに余計な心配はかけたくない。気づかれないようにしてくれ。まあ、明日検査結果が出たら、無理やりにも退院するつもりだが」

どこも悪いところなどない。今回倒れた理由は、単なる寝不足だ。今夜ぐっすり寝てしまえば……

「明日は、さすがに無理ではないでしょうか？」

「自分の身体のこととは、自分が一番よくわかっている。検査など必要ないくらいだ」

「爽様。それは医師が決めることです。必要な検査をして、医師の退院許可が出るまでは、安静になさってください」

爽は顔をしかめ、「わかったわかった」と投げやりに答えた。

「藍原さん、苺がついてるですよ。必要な検査をもらったあとは、苺がしっかり店長さんを見張つときますから、安心しててください」

苺は要に宣言する。すると要は爽にちらりと視線を向けてきた。無言で睨んでやる。

「ほらほら、店長さん。そんなふうにならなくて駄目ですよ。治るものも治りませんよ」

苺は、なだめるように爽の肩をトントンと叩く。

「これは頼りになりそうですね。鈴木さん、爽様をよろしくお願いします」

「はい。苺にドーンと任せちゃってください！」

苺は言葉どおり、大きくドンと胸を叩いてみせる。

少し離れたところに控えていた怜が、必死に笑いを堪えているのを爽は見逃さなかった。いづれ、なんらかのペナルティーを科してやることにしよう。うつぶん晴らしに、爽は理不尽な誓いをしたのだった。

9 したのか、しなかったのか ー苺ー

襟元にイチゴのアップリケのついたネグリジェを手にとって、苺はため息をついた。

まさか、行き先が病院だったなんてなあ。でも、これしかないんだからこいつを着るしかない。

諦めてネグリジェを着た苺は、洗面所を出た。部屋に戻ると、ベッドの枕元にある灯りだけがつけられていた。

店長さんが「苺」と呼びかけてくる。店長さんはベッドに入って上半身を起こしている。その光景を見て、苺は心細くなった。

「苺、こんなのばかり持ってきてきちゃったんですよ」

心細さを拭い去り、苺は店長さんに歩み寄りながら明るく言った。

イチゴのネグリジェ姿の苺を見て、店長さんはくいつと眉を上げる。

「おかしくありませんよ。病室が華やかで、私も明るい気分になる」

そ、そうなのか？

「では苺、そろそろ寝ましょうか？」

「あつ、そ、そうですね。店長さん、早く休まないと」

店長さんは身体を休めるために、さつさと寝なきゃいけないのに、苺に付き合ってもらっちゃってるよ。こんなじゃ、付添人失格だ。

苺は急いで店長さんを寝かせようとしたが、店長さんは「大丈夫ですよ」と言う。

「入院の必要など、本当はないのですから」

「駄目駄目。ちゃんと安静にしていなきゃ駄目です」

店長さんは仕方なさそうに横になった。苺はよしよしと頷く。

「貴女も、もう横になりなさい」

「店長さんが寝たら、苺も寝ますよ」

簡易ベッドに目を向けた店長さんは、不安そうに眉を寄せる。

「落ちないように気をつくるんですよ」

簡易ベッドは狭い。寝返りを打ったら、確実に落っこちる。

「苺、自分のベッドから、そんなに落ちたことないし、大丈夫ですよ」

「安心できないセリフですね」

店長さんは渋い顔で言う。

苺はベッド脇の椅子に腰かけ、店長さんの手を握った。

「苺。私が寝たら、すぐにベッドに入って寝るんですよ。その椅子に座ったまま寝てしまつては駄

目ですからね」

「はいはい。わかつてるですよ。ちゃんとベッドで寝ますつて」

苺の返事が信用ならないのか、店長さんは顔をしかめて目を閉じた。

しばらくすると、苺の手を握っていた力が抜け、店長さんは寝息を立て始めた。

寝ちゃったみたいだ。店長さんとは、もう何度も一緒に寝ているけど、こんなふうに眠りにつくところを見たのは初めてだ。

店長さんの寝顔……見惚れるほど綺麗だな。

さてと、苺も寝ようかな。そう思うものの、店長さんの寝顔から目が離せない。

じつと見つめ続けていたら、店長さんがふいに目を覚ました。

「あれっ、起きちゃったんですか？」

店長さんは眠そうな目で苺を見つめたあと、枕元の時計にチラリと視線をやる。

「まだ寝ないんですか？ 私が寝てから一時間は過ぎていますよ」

「ええっ？ そ、そんなに時間が経つてるんですか？」

「いますぐベッドに入りなさい」

店長さんに命じられ、苺は急いで簡易ベッドに潜り込んだ。

「本当に落ちないでしょうね？」

「心配ないですつて。ちゃんと気をつけますよ」

布団を被った苺は、まるで魔法をかけられたように、あつという間に眠くなってきた。「はふっ」

と、大きなあくびが出る。

「熟睡した貴女が、どう気をつけるんです？」

「そんなこと……」

苺だってわかりませんよ……という言葉の口にしたのかしなかったのか、苺にはもうわからなかった。

10 なんとなく嫌な予感 〈爽〉

爽は簡易ベッドに横になった苺を、訝しげに見つめた。『そんなこと……』と口にして、彼女は黙り込んでしまったのだ。「苺？」と、声をかけてみるも、返事がない。

まさか……本当に、もう寝てしまったのか？ 寝つきのいいことは知っているが……さすがに早すぎるだろう。

爽はいったんベッドを出て、様子を窺^{うかが}ってみた。すると、くーかくーかと、苺は気持ちよさそうに寝息を立てている。

「苺！ 言っておきますが、貴女は私の付き添いなんです。病人はこの私で……」

文句を言うと、苺は顔をしかめてそっぽを向いた。さらに寝返りまで打とうとする。

「ああっ！」

ベッドから落ちそうになった苺の身体を、爽は慌てて押さえた。ほっと息を吐いたものの、彼女をこのままにはしておけない。いつ落ちるかと気を揉^もんでいたのでは安眠できない。となれば方法はひとつ。

爽は苺を抱え上げ、自分のベッドに寝かせた。彼女と一緒に寝ていたのでは、そう簡単に眠れないのではないかと思ったが、さすがに疲労がピークに達していたのか、爽はあっさりと眠り込んでいた。

「藤原さん！」

鋭い声が聞こえ、爽はパツと目を開けた。

自分の顔を覗^{のぞ}き込んでいる者と目が合い、ぎよつとする。

一瞬にして、状況を把握^{はあく}した爽は顔を歪^{ゆが}めた。

どうやら、すでに朝のようだ。爽の顔を覗^{のぞ}き込んでいるのは、看護師長。

「もう朝ですか。師長、おはようございます」

「おはようございます、ではありませんよ。どういうことですか？」

看護師長は、爽の隣に寝ている苺を指さす。

「私の付き添いですよ」

「付き添いをつけるとの申し出は受けていますが、どうしてその付き添いが、患者のあなたと同じベッドで寝ているんです？」

「簡易ベッドの幅が狭すぎて、彼女が落ちそうになってしまったのですよ」と、説明すると、看護師長はこめかみを押さえた。

「何を考えていらっしやるんです？」

師長の質問を無視し、爽はベッドから降りて、まだぐっすり寝ている苺を抱え上げた。

やれやれ、とりあえず苺を簡易ベッドに移動させるか。

簡易ベッドに苺を降ろすと、眠っていた苺が「うーん」と呻いた。

おや、起きたのか？

苺は薄く目を開ける。

「てん……」

「目が覚めましたか？」

爽はすかさず声をかけた。苺が『店長さん』と呼んでは、看護師長が私たちの関係を不審に思う。

「は、はい。え、えーつと……」

病室に看護師長がいるのに気づき、苺は慌て始めた。急いで起き上がり、ベッドから降りる。

「まったく……」

「おっしゃりたいことは、わかっていますよ」

苺を叱責しようとする看護師長を遮る。

「なんでしたら、いますぐ、ここを出ていきますが」

「藤原さん、そういうことでは……」

「入院など必要ないんです。寝不足だっただけなのに、溝尾医師が強引に私を入院させたのですよ」

「溝尾医師は、貴方には休養と精密検査が必要と考えられて……」

「まあいい。とにかく、明日の十時までは退院させてもらいます」

「退院の許可は……」

「ええ、溝尾医師に、許可を出させますよ」

断固としてそう言う、看護師長は顔をしかめ、苺に視線を向けた。苺は慌てて姿勢を正す。

「ど、どうもです。……お、おはようございます」

いつもの苺らしい挨拶だったが、初対面の看護師長は困惑したようだ。対処に困っているのか、苺をじっと見つめている。爽は「苺」と、やさしく呼びかけた。

「は、はい」

「こちらは看護師長さんですよ」

「師長さんですか？ ど、どうも……鈴木苺です」

ぺこりと頭を下げる。爽の目には可愛い仕草に映ったが、看護師長はそうではなかったらしく、眉間に皺を寄せている。

「鈴木さん、あなたは付き添いで……」

「看護師長！」

爽は鋭く叫んだ。

苺を責めるのはお門違いだ。

「もう退室していただけませんか」

看護師長はもちろん納得していないだろうが、爽の言葉に従ってくれ、苺を一瞥してから部屋を出て行った。

「よ、よかったですか？　なんか、怒ってましたよ」

「気にはありませんよ。私はシャワーを浴びてきます。貴女も着替えなさい。すぐに朝食が運ばれてくるでしょうから」

「わかったです」

浴室に向かいながら、爽は小さく笑った。苺と一緒にならば、入院も悪くない。

シャワーを浴び、すっきりした気分で病室に戻ると、いい匂いが漂っていた。朝食が運ばれてきたらしい。そしてなぜか苺は、ベッドの向こう側から顔だけ出している。

「どうしたんです？」

「とっさに隠れちゃったんです」

「隠れた？」

「だって……苺の服、こんなのなんですよ」

爽は苦笑した。北の国に行ったときに用意したイチゴの服を着ている。ネグリジェ同様、子どもっぽいデザインだ。

「悪くありませんよ」

そう言ってやるが、苺は納得できないようだ。

「慌てていたから、適当にバッグに押し込んだじゃって。行き先が病院だってわかっていたら、イチゴ柄の服は避けたのになあ」

「病室が華やいでいいと言ったでしょう。さあ、それより冷めないうちに朝食をいただきますよ」

取り合おうとしない爽に苛立つたらしく、苺は頬を膨らませた。すつくと立ち上がった彼女は、くるりと背を向け、自分のお尻をバンと叩いて見せる。そこには、大きなイチゴのアップリケがついていた。

「見てくださいよ。こんなんですよ。とてもハタチのオンナが着る服じゃないですよ」

苺はプリプリしながら文句を言う。『ハタチのオンナ』という言葉に、爽は笑えたらなかった。

「可愛いですよ」

褒めたのに、苺はむっとする。

「あのですねえ」

「苺、服のことは後回しにして、とにかく朝食をいただきますませんか？　お腹が空いてしまつて……」

「そ、そうでした。店長さん、いま病気なのに、苺ってば……さ、さあさあ、食べるですよ」

弱々しく言ったら、思った通り苺は焦り始めた。爽は内心にやついた。まったく苺ときたら扱いやすい。

朝食はとても美味しかった。

「イチゴヨーグルトがなくて残念でしたね。昼食では頼んでおきましようか？」

「ええっ、病院なのに、リクエストができるんですか？」

「吉田に頼むんですよ」

「ああ、善ちゃん、ここにくるですか？」

「ええ。色々持つてきて欲しいものがありますから……それと、苺」

「なんですか？」

「貴女に付き添いをしてもらうのに都合がよいので、病院の関係者には、貴女は私の婚約者だということにしてあります」

「ああ、はい」

「ですから、私のことは店長さんと呼ばないように……」

言い聞かせている途中だというのに、ドアをノックする音がした。ついで「藤原」という声が聞こえる。

爽は顔をしかめた。溝尾か……

「どうぞ」

ドアが開き、パタンパタンとスリッパの音を立てながら、溝尾が入ってきた。もうひとり、若い医師を連れている。溝尾はくたびれた白衣を着ているが、そちらは真っ白な白衣をパリッと着こなしているハンサムな青年だ。

「どうだ、体調は？」

「まったく問題ない。溝尾、私は今すぐここを出たいんだが」

つい、喧嘩けんかを売るように言ってしまう。

「やれやれ。相変わらずだな。いいか、必要な検査をして、その結果、問題がなければ出してやる」

溝尾はそう言うと、苺に視線を向ける。

「この子は？」

「すでに聞いているんじゃないのか？」

溝尾は爽の質問を無視して、苺をジロジロ見る。

「溝尾、用があるのなら、さっさとすませて出て行ってくれないか？」

「そうつれないことを言うなよ。……そうそう、彼は研修医の白井しらいだ」

白井を紹介した溝尾は、今日の検査について説明すると、あっさり病室を出て行った。嫌な予感がした。何か企たくらんでいるのではないだろうか？

「いっぱい検査するんですね？」

「必要ないのに……」

そう言うと、苺は元気づけるように、爽の腕をとんとんと叩く。

「検査はしといたほうがいいですよ」

「苺、検査の間、ずっとついていてくださいね」

溝尾のことが気がかりでならず、爽は苺に頼み込むように言った。

11 付き添い絡まれる　　苺

検査の時間になり、店長さんを迎えにきたのは、さっきのちよつと恐い看護師長さんだった。苺を検査に同行させるかどうかでまた揉めたが、店長さんが苺を連れて行くと言いつつだったので、師長さんはしぶしぶ折れた。

店長さんと苺は一緒に検査室に向かい、苺はその前の長椅子で待つことになった。

「それじゃ、頑張ってくださいよ」

苺の励ましに、店長さんがくすりと笑う。

「ええ、頑張ってくださいよ。苺」

店長さんは苺の頭を撫で、なぜか廊下を左右に見る。

「なんか、気になることでもあるんですか？」

「いえ。苺、私が検査を終えて出てくるまで、ここから動かないように。ここにちゃんと座って待っているんですよ」

「わかってますよ」

苺は笑いながら答えた。北の国に行ったときも、同じことを言われたなと思い出す。店長さんが

検査室に入ると、苺は長椅子にちよこんと座り、北の国での思い出に浸ったのだった。

「鈴木さん、でしたよね？」

検査室のドアをじーつと見つめていた苺は、呼びかけられて顔を上げた。

声をかけてきたのは、病室に溝尾さんと一緒にやってきた、研修医の白井さんだ。

髭面の溝尾さんはお医者さんらしくないけど、このひとは見るからにお医者さんって感じ。

「隣に座っても構いませんか？」

「苺に断ることないですよ。どうぞ」

白井さんが座り、苺は視線をドアに戻した。検査って、どのくらい時間がかかるんだろう？

「藤原さんが心配ですか？」

そう問いかけて、苺は白井さんに目をやった。

「そりゃあ心配ですよ」

退院したら、もうちよつと仕事をセーブしたほうがいいですよって、言ってるやろう。

「この検査は、三十分以上かかりますよ」

「そうなんですか？」

「ずっとここで待っていてもなんですし……僕とお茶でも飲みながら待つというのはどうですか？」

「お茶？」

苺は思わず白井さんの言葉を繰り返した。白井さんがなぜ苺をお茶に誘うのか、さっぱりわから

ない。

「ええ。一階に喫茶店があるんですよ。パフェなんかもありますよ」

「ええっ、病院でパフェが食べられるんですか？」

意外な事実にも、思わず問い返してしまふ。

「ええ。チョコレートパフェがいいですか？ それともフルーツパフェ？ 藤原さんのお知り合いですし、僕がご馳走しますよ」

苺はきゅっと眉を寄せた。

何を言ってるのだ、このひとは？ 苺はいま、そんな場合じゃないってのに。

「苺、ここにいなきゃならないんで」

「検査が終わるまでに戻ってきたらいいじゃないですか。さあ」

白井さんはさっと立ち上がり、愛想のよさそうな笑みを浮かべながら苺に手を差し出してきた。

だが、苺は大きく首を横に振る。

「苺、行かないですよ」

「どうしてですか？ ちょっとお茶してくるだけのことですよ」

苺は眉を寄せて、白井さんを見つめた。

苺はいま、店長さんのことが心配で心配でならないっていうのに、お茶するなんてありえないよ。

「いま、爽は検査してるんですよ」

「え、ええ」

「苺は付き添いなんです。爽が出てくるまで、ずっとここで待ってるんです。お茶を飲みたいなら、白井さんひとりで رفتてくるといいですよ」

「そう……ですか」

白井さんは頭に手をやって困ったように言う。

「失礼します」

白井さんは唐突にそう言うのと、背を向けて立ち去った。ひとりになってぼっとした苺は、またドアに視線を貼り付けた。

大丈夫かなあ？ 検査の結果が悪くないといいんだけど……もし悪かったら？

不安がむくむくと湧いてきて、苺は胸が苦しくなってきた。

店長さんが、ほんとに病気だったら……ど、どうしよう？

苺は、滲んだ涙を手の甲で乱暴に拭いた。

「何泣いてんだ？」

ふいに声をかけられ、苺は驚いて顔を上げた。今度は髭面の溝尾さんだ。

「検査の結果が悪かったらどうしようって……不安になっちゃって……」

苺は顔を歪め、伝う涙を拭う。

「なあ、君さ、ほんとに藤原の婚約者なのか？」

その問いかけに、苺はむっとし、きゅっと眉を寄せた。

「いまはそんなことどうでもいいですよ！ 店長さんの一大事なんですよ」
「テンチョウウさん？」

眉をひそめて聞かれ、苺は焦った。

「あ……そ、爽ですよ。爽、爽」

「テンチョウウさんって、藤原のことか？」

「そ、そうじゃないです。爽です」

「君、自分で何を言ってるか、わかってんのか？」

「わかってるですよ。つまり、爽なんですよ？」

「何がそうなんだ？」

「だから、爽ですよ」

「爽」ってのは、藤原の名前か？ それともそうですって言ってるのか？」

「な、名前ですよ。……まあ、そうですねって言ってたときもあったですけど……」

「君、わざとか？ わざとだろ？」

溝尾さんは大声を上げ、両手で頭を掻きむしった。苺はびっくりし、溝尾さんから身を引く。

周りにいる人たちが、溝尾さんの大声のせいで、こちらを注目している。

「わ、わざとって、何がですか？」

周りの視線を気にしつつ、苺は溝尾さんに尋ねた。

「全部だ。君の発言全部！ 俺を苛立たせようってんだろ？」

「苺は別に……」

「ぼそぼそ言うなっ！」

怒鳴られて苺は身を竦めた。溝尾さんはぐつと顔を近づけてくる。

「みんなが見てるですよ」

溝尾さんはハッとしたように身を引いた。周囲を見渡した溝尾さんは一瞬洪い顔をしたが、気にしないことにしたのか苺の隣にどかと座る。溝尾さんにはさつとここから立ち去ってもらいたかったのだ、がっかりだ。

「藤原とはどこで会った？」

まるで刑事のように、溝尾さんは問い詰めてくる。苺はむっとした。なんで、容疑者みたいに扱われなきゃなんないんだ。

「苺は黙秘するです」

きっぱりと宣言してやる。

「はあ？ なんだって？」

苺はまたドアに視線を貼り付けた。

店長さん、早く出てこないかなあ？ 三十分もかかるんじゃない、まだまだだね。それにしても溝尾さん、早くどこか行ってくれないかな……

「なあ、君」

溝尾さんは先ほどとは打って変わり、やさしく話しかけてきた。豹変（ひょうへん）ふりが気味悪く、鳥肌が

立ってしまおう。

「み、溝尾さん、お仕事しなくて……」

「なあ、白井ってさ……いい男だろ？」

突然話題が変わり、苺はパチパチと瞬きした。

「実はな、あいつ大病院の跡継ぎなんだ」

「そうなんですか」

他に答えようがなく、適当に相槌を打つ。

「ああ、若くて男前、医師としての才能もあるし性格もいい。モテ過ぎて困っているらしい」

「はあ、そうですか」

「その彼がだな」

溝尾さんは苺を見て、にやっと笑う。

「君のこと、可愛いってさ。どうやら君、白井に気に入られたみたいだぞ。どうする？」

溝尾さんはやたらもったいぶって言った。

「白井さんは、苺のことなんて気に入ってないですよ」

そう言うと、溝尾さんは怒ったように眉を釣り上げた。

「俺が嘘ついてるってのか？」

なぜか脅すように言う。苺は呆れた。

「溝尾さんが嘘をついてるかどうかは、苺にはわかりませんよ。わかるのは本人の溝尾さんだけ

です。けど、苺は、白井さんが苺のことを気に入ってなんかいないってのは、わかるですから」

溝尾さんは、苺をしばしじっと見つめたあと、右の眉をくいと上げた。

「お前、言葉遣いがへんてこすぎるぞ。それもわざとか？」

苺は顔をしかめた。

「へんてこりんでも、ちゃんと伝わるですよ」

「そのしゃべり方が、可愛いとかって思ってるんだろ？ 別に可愛くねえし、それどころかアホっぽ

いぞ」

「溝尾さんにどう思われても、苺は構わないです。苺には関係ないし」

「関係ないことないだろ。自分のことを中傷されてんだぞ」

溝尾さんはなぜか、むっとしたように言う。

「わかんないですねえ。どうして溝尾さんが怒るんですか？」

苺を中傷してんのは溝尾さんなのにさ。

「馬鹿だ。お前は馬鹿だ！」

もたれた。

なんなんだ、もおつ。大人気ないひとだね。

苺は店長さんを恋しく想いつつ、検査室のドアを哀しい気分で見つめた。

早く出てきてくれないかなあ。